
ダイヤモンド

コルレオーネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイヤモンド

【Nコード】

N5959A

【作者名】

コルレオーネ

【あらすじ】

日々のフラストレーションはどんどん溜まっていく。何かをしなければ、でも何をすればいいのだろう。

蠅

部屋中に散乱しているゴミ、脱ぎ捨てられたジーンズや下着、無数に転がっている空き瓶や缶、何かが腐って、饅えたような臭いが部屋中に広がっている。

その中でゴミに包まれるように僕は眠る。午前2時、こども湿気が多いと体中がベトベトする。もう夏が来るのか、春はあつという間に過ぎて行った。

僕は目を開けた。暗闇の中をパソコンの明かりが照らしている。パソコンの電源は基本的に切らない。どうせ電気代を払うのは僕では無い。僕が心を許せるのはパソコンだけだ。

なかなか寝付け無かった。暑さや湿気のせいもあるのだろうか、おおかた奴のせいだ。

鈍い羽根の音、さつきから憎らしく飛び回っている、糞みたく馬鹿でかい蠅。なんでわざわざ僕の近くを飛ぶんだろう、窓を開けっ放しにしているのに、ちつとも出て行こうとしない、何度も何度も壁にぶつかり、嫌な音を立てている。頭悪いんじゃないだろうか。

蠅なんかいなくなっても誰も困りはしない。絶滅しちまえ、奴らなんか。糞つたれ、ぶち殺してやる。

僕は跳ねるように起き上がり、電気を付けた。薄い週刊誌を手にとり、クルクルと丸めていく。羽根の音のする方へ意識を集中させる。部屋の角の方で飛び回っている黒い塊を確認すると、息をひそめてゆっくり近づく。蠅が本棚へ止まる、その瞬間に、僕は一気に近づき、手に持っていた週刊誌を思い切り振り下ろした。

足元のゴミを踏み潰し、足の裏がベトベトになった。週刊誌が本棚に当たり、ものすごい音を立てながら本棚は倒れた。本はもちろん、本棚の上に乗っていた目覚まし時計やらCDやらが勢い良く飛び散った。週刊誌には蠅の痕跡らしきものは見当たらない。仕留める事は出来なかったらしい。

音に驚いたのか、母が部屋の様子を見に来た。その顔には恐れの色が見える。僕がヒステリーを起こして本棚をぶっ倒したのだ、とても思っているのだろうか、馬鹿にすんな。

僕が母の問い掛けを無視し続けていると、何も言わず部屋から出て行った。気が付くと蠅はいなくなっていた。僕は電気を消し、布団に包まる。あっという間に眠る事ができた。

その日も僕は夢を見なかった。楽しみにしていたのに。最近夢を見る事が少なくなった気がする。

ツアラトウストラはかくも語らず

目が覚めると、もう昼過ぎだった。窓からはカーテン越しでも思わず目を閉じてしまうくらい眩しい陽射し。カーテンを空けると、気持ち悪くなるくらい良く晴れている。ただ真っ青な空、それと地平線に沿うように雲の塊が積み上がっている。入道雲だ。

ちきしょう、これじゃあまるで夏じゃねえか。

本棚は倒れたまま。中の本があちこちに散らばっている、落ちている目覚まし時計の針は微動だにしない。それもそのはずだ。二つある電池の片方が飛び出してしまっている。

あれだけ派手に倒したからなあ。しかし、蠅を追いつけたあげく本棚をぶち倒した僕って、本当に異常なんだなあ。

そう思うと、なんだか可笑しくなってきた。笑いが込み上げてくる。思わず顔がにやけてしまう。そしてとうとう、堪え切れず吹き出してしまった。一度笑い出してしまうとなかなか治まらなかった。何度も何度も、昨日の自分を思い出して笑った。何となく学校を中退し、職にも就かずダラダラ日々を過ごしている僕が、唯一感情を剥き出しにして熱中するのは、蠅を退治する時だけだなんて、傑作だ。ギャハハハ。

笑いは思い返す度にやってきてなかなか去ってはくれなかった。

僕の人生なんてこんなものだろう。感動や悲劇なんてものとは全く無縁、色んな人から笑われ、蔑まれる喜劇そのもの。人は、あまりにも悲しいと、泣くのを乗り越えて笑いしか出てこないものなのか。そして、最後には感情すら風化して行くのだろう……なんて、ちやちな哲学めいた事まで考えてしまう自分に気付くと、また一層笑いが込み上げてきた。

腹筋がツつて苦しい。頬の筋肉も痛くなってきた。それでも笑いには途切れる事を知らない。一人で笑いのツボにハマリ、しかも、その理由が自分の滑稽さによるもの。なんて、他人が今の僕を見たら

何を思うのだろうか、もはや救いようがない。

そこまで思うと、急に冷めてきた。笑いが去っていくのが分かる。さっきまで悶絶していたのが嘘のようだ。

そうか、気持ちを冷めさせるには他人の目を気にすればいいのか。確かに他人の気持ちを考える、なんて、この上なくくだらない事だからな。

僕は窓から外を見た。空模様や気温はすっかり夏そのものだが、蝉の声が聞こえない。その様子は、どこかアンバランスに感じた。

僕の事

この先、希望なんて何も無いのに生きていつてどうするんだ。以前こんなことを考えるようになっていた。

考え始めると止まらない。僕の意味とは別に、勝手に頭が働いてしまふ。特に寝る時が酷い。

電気を消し、ベットの上で横になる。真っ暗な部屋の中、うつすらと浮かぶ天井の輪郭を眺めている。すると、来るのだ。何処からともなく、途方もない絶望感や孤独感。

目を閉じると、瞼の裏に見えるのは真っ黒に塗られた未来。途方もない四次元の闇が足元に迫って来ているような気がした。

一時期は軽い不眠症のようになっていた。ずっと考えて眠れず、気が付くと朝日が昇っている事すらあった。

なんでこんな事になっているんだ？いつの間にか前にも後ろにも進めず、闇に押し潰されそうな感覚。

僕は社会に上手く適応できず、何をやるにもやる気が起きなかった。だから時の流れに身を任せてきたが、闇は濃くなるばかりだった。

僕は苦しみ続けてきたが、僕にはこの苦しみを語り合える人がいない。誰も僕の声に耳を傾けてくれないのだ。

親は僕の叫びを聴いてくれない。いつも僕の顔色を伺ってばかりだ。きっと僕の事を異常だと思っているに違いない。

学校の教師は腐った連中ばかりだった。頭ごなしに叱る事しか知らない単細胞ばかりだ。

僕には友達らしい友達はいなかった。誰も僕を相手にしてくれない。適当に相槌を打って流す奴ばかりで、真剣に僕の声聞いてくれる奴など一人もいなかった。空気に話してるんじゃないぞ、畜生。

結局、僕は孤独だ。自分の傷を自分で舐めて癒すしかない。周りはバカばかりだ。僕がこんなに苦しんでるのは他人のせいだ。

ある日、僕はこの苦しみから一時的に和らげる方法に気付いた。それは物語を想像すること。日本中のバカをぶち殺す。肉をちぎり、骨を砕き、はらわたを引き裂き、脳みそをぶち抜く。バカにつける薬は無い。そして最後に、バカ共の屍の上で日本一のバカ、つまり僕が、自分の頭に拳銃をぶっ放す。そこで僕の物語は幕を閉じる。

初めてこの物語を想像した日の夜は気持ち良く眠れた。しかも楽しい夢まで見ることができたのだ。鳥のように自由に空を飛ぶ夢。久しく夢を見てなかった僕は、とても幸福な気分になった。

そして、僕は毎晩、この物語を想像するようになった。想像した後は、いつも決まって気持ち良く眠れた。そしてあの夢も見ることができた。僕は毎晩寝る時が楽しみになっていった。

物語の内容も日を追う毎に鮮明になっていった。

チラチラと横目でこちらを伺ってくるバカな親をぶち殺し、偉そうに見下してくるバカな教師を叩き殺し、作り笑いを浮かべながらあーそうだよー。うん、わかるわかる。なんてぼざいているクソバカ共を虐殺する。

そしてそいつらの死体の山に僕は佇んでいる。真っ赤な夕日をバツクに、辺りは血の臭い。僕はこめかみに銃口を当てる。陽の光を全身から感じて、僕は目を細める。そして僕は引き金を引く。短く響く銃声、その瞬間、僕は鳥になり夕日に向かって飛んでいく。

いつの間にか、僕は眠ってしまっていた。僕はこの時、この物語が生きる糧になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5959a/>

ダイヤモンド

2010年11月21日02時28分発行